

家畜に合わせて生きる：アンデス牧民と動物との相互作用に関する予備的考察

鳥塚あゆち（青山学院大学）

キー・ワード： アンデス牧畜、人間と家畜との関わり、家畜間の相互作用、複数種

Vivir con ganado: un estudio preliminar sobre las interacciones entre los pastores altoandinos y los animales

AYUCHI TORITSUKA (Aoyama Gakuin University)

Keywords: el pastoreo en los Andes, relaciones entre humanos y ganados, interacciones entre ganados, multiespecies

ペルーのアンデス高地では、人々は在来種のラクダ科動物であるリャマとアルパカのほか、ヒツジ・ウシ・ウマなどの旧大陸由来の家畜も含め、複数種の家畜を飼養してその生業を成り立たせている。牧畜家畜以外にも護畜用のイヌや、稀にネコやニワトリも飼い、近年では現金収入源としてマスを飼い始めた者もいる。当然のことながら、種による性格や行動の差異が存在することから、放牧だけ考慮してみても複数種を扱うことは負担になる。にもかかわらず、人々は多様な動物とともに暮らすことを選択している。

稲村はアンデス牧畜形態の特徴として、定住性、乳利用の不在、農耕との強い結びつきの3点を挙げている [Inamura 2006]。ラクダ科動物の牧畜は標高 4000m 以上の高地で行われ、放牧地と住居を往復する日帰り放牧の形態をとる。本報告では、これらの特徴に加え、人間と動物および動物間の相互作用に着目し、そこから描出できるアンデス牧畜の特徴について検討した。

人間と他種との相互関係に関する議論は、生態人類学分野で研究の蓄積がある。当該分野では、人間と動物の相互関係に焦点が当てられ、人間による生態系利用の解明が主たる目的とされた [近藤・吉田 2021:32]。これに対し、2010 年頃から議論が盛んになっているマルチスピーシーズ民族誌／人類学では、3 者以上が絡まり合い、ともに生きる関係が考察される。近藤 [2022] はその特徴を、多種と「ともに生きる」というスローガンを持ち、バラエティ豊かな存在が検討の対象となり、人新生への強い関心から傷ついた地球に生きる術の模索を行うと述べている。さ

らに研究成果の公表においては、映像やアートなど文字によらない表現を積極的に採用することも特筆すべき点とされる。

生態人類学においても、人間と動物、異種の動物同士など非対称なもの同士の相互行為に注目して研究が進められてきたが [木村 2015]、近藤らが指摘するように、無機物や菌類などはその射程になかったと言えるだろう。動物と人間の二者間関係ではなく、複数種が寄り集まってひとつの場に生きるという捉え方は今後の議論展開において有用であり、また人新世における他との共生という点ではデンス牧民の生き方から学ぶべきところがあるように思われる。

これらの議論を踏まえ、報告者が直接的に動物と関わった経験から3つの事例提示を行った。なお、事例2および3の詳細は鳥塚 [2022] で報告している。

事例1は、2017年8月の放牧中に、湿地 (*bofedal*) に沈んで溺れたアルパカを牧民 A と救出した事例である。死にかけているように見えたアルパカを A は見捨てず、体の向きを変えて日に当てるなどしてその体を温めた。夕方に家に群れを帰す際には、ともに帰ることを期待してアルパカの群れを近くに誘導した。アルパカからはこの個体のおいを嗅いだり立ち止まったりしたが、リャマやヒツジは近づこうとしなかった点が特筆される。

事例2では、2016年3月に観察したリャマ2頭（黒茶色、白色に茶の斑）の出産について報告した。黒茶のリャマの出産は通常通り進んだが、白色の出産は難航し、30分経っても終わらなか

ったため、牧民 B が外に出ていた仔の首と脚を途中まで引き抜いた。通常は出産時には母畜は神経質になり、人間や他個体が近づくのを嫌がるが、この場合は介助を受け入れたように思えた。また、出産が近くなるとリヤマは 2 頭に近づいてきたが、アルパカとヒツジは無関心だった。B は出産後に、正しい母子認識を促すため、同じ場所でも出産した 2 頭を引き離した。

事例 3 では、2017 年 8 月に観察した人間による仔ヒツジへの人工哺乳について報告した。人工哺乳はそれほど珍しい事例ではなく、家畜の種別を問わず行われる。母畜は初産・栄養不足等の理由から育児を放棄することがあり、その仔は「チェタ (cheta)」と呼ばれる。当該事例では、母畜との死別がその理由だった。哺乳のために群れの中からチェタを呼ぶと、自分が呼ばれたことを理解して走ってくる。他方、他の個体は耳だけ動かしたり顔を向けたりはするが、「自分のことではない」とわかっており、人間の呼びかけに応答しなかった。

以上の事例から、アンデスにおける人間と家畜、家畜間の相互作用の特徴を、次の 3 点から考察した。

1) 人間と家畜の相互作用

牧民は、出産介助においても哺乳においても、基本的には家畜の主体性を重視し、完全に介入しないという選択をしている。出産では母子の関係を分断しないため、リヤマ自らが仔を産むことが求められ、また「家畜が嫌がる」という理由から強制的な乳母付けも行われない。さらに別の日には、チェタだったヒツジが成獣になっても人間の家に近づくと、「よくないこと」とみなして群れへと追いやっていた。家畜は人間が馴致した動物ではあるものの、過度に人間に慣れて群れ社会から除外されないように配慮しているように思える。

2) 家畜の帰巢本能と群居性

ラクダ科動物には帰巢本能があると言われるが、まさに溺れたアルパカの事例はそれを明瞭に示していた。夕方に群れとともに家に帰ることができなかった個体は、夜間に、徒歩で 20 分ほどかかる場所から戻り、囲いの石積み飛び

越えて群れに合流していた。通常、群居性の動物が 1 頭で行動することはないため、牧民もこのことに驚いていた。家畜は普段から鳴いてコミュニケーションをとることで個体同士を認識し合い、帰属する群れを理解していると考えられる。

3) 種による親和性と区別

溺れたアルパカと出産の事例からは、同種間の親和性、別種間の区別が明確に見てとれた。放牧への出発時や帰宅後に囲いに入る際、また囲いの中でも、家畜は種ごとにまとまる習性をもっていることもよく観察される。

以上から、人間が家畜を完全に馴致しない関係性の中での、人間と家畜の相互協力、家畜の主体性重視、呼応と非応答という特徴が確認できる。また、同種間の親和性をうまく利用して複数種の放牧を成立させていると考えられる。

【主要参考文献】

- Inamura, Tetsuya, 2006, *Las características del uso de camélidos en los Andes: el pastoreo y la resurrección del «Chacu», la tradición incaica en el Perú. En Desde el exterior: el Perú y sus estudiosos, tercer congreso internacional de peruanistas, Nagoya, 2005*, Luis Millones y Takahiro Kato (eds.), pp.35-70, Fondo Editorial de la Facultad de Ciencias Sociales, UNMSM, Lima.
- 木村大治, 2015, 「はじめに：行為のもつれ」、『動物と出会う I: 出会うの相互行為』、木村大治編、pp.i-xiii、ナカニシヤ出版。
- 近藤祉秋, 2022, 「マルチスピーシーズとは何か?」、『思想』(マルチスピーシーズ人類学)、2022 年第 10 号 (第 1182 号) :7-26。
- 近藤祉秋・吉田真理子, 2021, 「人間以上の世界から「食」を考える」、『食う、食われる、食いあう：マルチスピーシーズ民族誌の思考』、近藤祉秋・吉田真理子編、pp.9-65、青土社。
- 鳥塚あゆみ, 2022, 「人間・家畜・自然の関わり合いから生成される文化：アンデス高地で家畜とともに生きる人々から学ぶ」、『「縁側」知の生成にむけて：多文化関係学という場の潜在力』、多文化関係学会編、pp.189-206、明石書店。